断章
旭川のアイヌ語地名研究
114
高橋 基

―伊野川から忠別川までの地名③―

前回の終わりに、**掲載地図**(1)の伝・間宮林蔵の文化十四年(一八一七年)作成の『蝦夷図』(仮称)の伊野川の部分を紹介した。

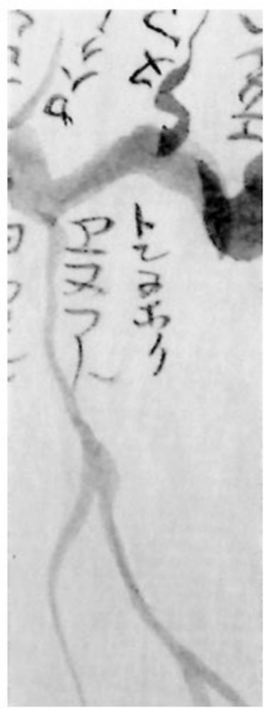
この地図では、伊野川は、①イヌー川と表記され、知里真志保が書いたように、ペッ(pet 川)もナイ(nay 沢)も付かず、山田秀三の解説のように、川名の由来はイヌン(inun 狩漁期用の仮小屋)で、伊野川は、永田方正が記録した、「漁人の仮小屋のある川」の意味とまとめた。

左下の地図に記載の二つの支流、②オン子ナイと、③イハヨマイヌーは、明治三十一年製版の『北海道仮製五万分一図』にも記載された上、現在の河川名にも活用されている。

すなわち、②オン子ナイ(onne-nay 大きい・川)は、バーサー大会が開催される、神居町富沢の富沢小学校の横を流れる川で、公式河川名もオンネナイ川である。

③イハヨマイヌーは、右の仮製五万図では、エパナオマイノペッ(e-pana-oma-ino-pet 頭が・川下の方・に行っている・伊野川)で、この川の水源が、川下(註―石狩川の下流、則ち、神居第三線川と接する)に向かっている意味である。幌加内町の由来となった、ホロカ・ナイ(horka-nay 逆戻りする・川)は、この川の水源が、本流の雨竜川の下流の方へ、向かって逆戻りしているので名付けられたもので、道内に多いアイヌ語地名である。同じ意味の川であるが、こちらの方は類例が少ない。昭和五十年発行の五万地形図では、アイヌ語の意味から「逆川(さかがわ)(あるいは、さかさがわ)沢」と命名された。現在は伊野川支流川が公式河川名である。これらの点からも、伝・間宮林蔵のこの地図の信頼度は高いものといえる。

(1)伝・間宮林蔵『蝦夷図』


(2)『川々取調帳』

(3)『松浦山川図』

さて、安政四年(一八五七年)の松浦武四郎の野帳(のちょう)『巳第二番』と、報文日誌の「再篙(さいこう)石狩日誌」、安政五年(一八五八年)の野帳『午第一番』の伊野川の記事は、前々回に紹介した。

写真(2)は、右の踏査後に描かれた『川々取調帳』の伊野川の川筋図であるが、支流名が全く書かれていない。

松浦武四郎は、右の『川々取調帳』等を元に、安政六年(一八五九年)に、『東西蝦夷山川地理取調図』(木版彩色刷二十六枚―以下、『松浦山川図』と略称する)を刊行する。**写真**(3)は、その伊野川の略図である。

『松浦山川図』の伊野川(エヌブト)では、『川々取調帳』にはなかった三つの支流名が書かれている。すなわち、④ホンエヌブト、⑤キンクシエヌブト、⑥マタクシエヌブトである。支流名にエヌブトゥ(enu-putu 漁人の仮小屋のある川・の川口)は不自然なので、エヌ川として、それぞれ地名解をすると、次の通りである。

④ホンエヌブト→ポンエヌプトゥ(pon-enu-putu 小さい方の・エヌ川)、⑤キンクシエヌブト→キムクシエヌブトゥ(kim-kus-enu-putu 山側・を通る・エヌ川)、⑥マタクシエヌブト→マタクシエヌブトゥ(mata-kus-enu-putu 冬・通る・エヌ川)となる。

⑥のマタクシエヌブトは、冬に交通路として利用する伊野川の意味である。

この三つの支流名は、先の松浦武四郎の「再篙石狩日誌」や『川々取調帳』、また、蝦夷地の諸河川を記録した松浦武四郎の『川筋取調図』にも記載されていないものである。

これは、当連載㊵の「内大部川のアイヌ語名(下)」でも紹介したが、松浦武四郎が安政五年(一八五八年)九月十日付、箱館奉行所宛てに、空知川から内大部川経由で、伊野川へ出て、忠別太の大番屋へ達する新道の開削計画を提案した。伊野川の三つの支流名は、この新道開削案のために、松浦武四郎が創作したアイヌ語地名である。『松浦山川図』の中には、このような例もあることを紹介する次第である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します